



**飯島 佑香** (いじま ゆうか) 由木中央小 6年生

作品名：選択

図 書：最後の医者は桜を見上げて君を想う

人生は一度きりしかない。その人生をどう歩むのか。病気と戦うのか、家族と最後まで一緒に過ごし、病気と共存するのか。それを決めるのは医者ではない。決めるのは自分なのだと、この本は教えてくれた。

桐子は「死神」と呼ばれ、病院ではきられている。桐子は他の医者と違い、病気と戦えとは言わない。なぜなら、全ての患者が病気と戦うことを望んでいるわけではないと考えているからだ。

ある日突然、白血病と診断された会社員、浜山の病気と戦う姿はそうぜつだった。白血病の罹患率は年間で十万人あたり六・三人。とてつもなく低い確率だ。私は白血病がこんなにも恐ろしい病気だとは思っていなかった。桐子に死ぬのも一つの手だと言われても、妻やこれから生まれてくる子供のために全てをかけ、最後まで戦う。どんなに少ない可能性にも打ち勝とうと思う強い意志。私だったら、浜山のように最後まで強い意志で戦うことができるだろうか。つらくてどうしようもなく、途中であきらめてしまうかもしれない。また、浜山の妻のように、病気と戦う家族を力強く支えることはできるだろうか。浜山は戦って戦って戦って、そして亡くなった。私は涙が止まらなかった。浜山は亡くなったが、病気に負けたのではないと思う。最後の最後まで意志をもって病気に立ち向かっていたのだ。本当に強い人だと思った。

浜山のように病気に立ち向かうだけが、戦うということではないと思う。治りょう方法が見つからず、死を受け入れなければならない病気にかかってしまった川澄。治りょうをすれば治るかもしれないのに別の選択をした桐子の同りょうの音山。二人とも、浜山とは違う方法で病気と向き合ったと思う。絶望しながら病気と向き合った川澄は浜山とは全く逆だけれど、やっぱり強いと思った。私は川澄のように冷静でいられる自信がない。音山は、ずっとお世話になったおばあちゃんに最後に元気な声を聞かせるために、治る治りょうをせず、声を取りもどすための手術を選んだ。ふつうの医者からすれば絶対に助かる方法を優先させて、生きるための治りょうを患者に進めるだろう。間違っているわけではないが、それが本当に患者の気持ちなのだろうか。私はわからなくなった。命はひとつしかないから誰だって病気になりたくないし、助かりたいと思う。でも、それだけで良いのか。桐子はそれを理解していたんだと思う。私はこの本を読んで、病気になった後、どう考

えてどう過ごすかによって人生が大きく変わると思った。残された命をどう使うかを決めて、自分が望む方法で病気と向き合うのが正しい気がした。私だったら少しでも長く生きたいと思う。でも、苦しんでまで生きたいとは思わない。考えは人それぞれだと思う。だからこそ、その選択肢をあたえてくれる桐子のような医者が必要なんだと思った。

この本は命の大切さだけでなく、自分の道を自分で選ぶ強さも私に教えてくれた。ささいな事でも周囲に流されず、自分が選んだ道を信じていたい。人生は一度きりだから、どんな時も前を向いていたいと強く思った。